

## ミナンカバウ特別州を夢見て

### —インドネシア西スマトラ州におけるアダットとイスラームのダイナミズム

西川 慧

#### 1. はじめに

本稿の目的は、インドネシア西スマトラ州をミナンカバウ特別州へと変えようとする人びとの運動と、それに対する人びとの反応に注目して、現代におけるミナンカバウの人びとのアダット（慣習法）観念の特徴を、歴史的な変遷をなぞりつつ明らかにすることである。

アダットとは、インドネシア研究の枠組みのなかでは「慣習」や「慣習法」と訳される言葉である。インドネシア政府が発行している国語辞典 *Kamus Besar Bahasa Indonesia* (Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa 2016) によれば、アダットには4つの意味があるとされている。すなわち、1) 以前から行われ普及している決まり（行為に関するものなど）、2) すでに習慣になっている方法、3) 文化、価値、法的な価値にもとづいた文化的考えの所産、および複数の規則が結びついたひとつのシステム、4) 有効な規則にもとづいた税である。以上の説明からは、アダットが人類学における「文化」概念と近いものの、「決まり」や「規則」といった言葉が含まれていることから、法としての意味合いがあることが分かるだろう。

インドネシアを対象として研究を行う際にアダットが重要になるのは、それがインドネシアの司法システムを構成する法源として機能しており、土地の所有や財産をめぐる紛争調停において適用されているからである。特に1998年に民主化が達成されて以降、それまでの中央集権型から地方分権型へと舵が切られると、アダットを地方自治の土台に据えようという動きが活発化した。それに伴い、国内の各地でアダットを再興しようとするアダット復興運動が起こり、研究者の注目を集めている (Davidson and Henley 2007; 高野 2015)。まさに、アダットは現代のインドネシアを論じるうえで最重要トピックのひとつと言えよう。

ポスト・スハルト後のアダット復興運動において特に注目を集めたのが、最も早くから運動を始めたミナンカバウの人びとである。彼らが求めたのは、アダットに依拠した伝統村落「ナガリ」(*nagari*)の復活であった。彼らにとってのナガリとは、木材の切り出しや換金作物栽培の場といった経済基盤としての村落共有地(*tanah ulayat*)を持ち、親族集団長たちの寄り合いによって運営される政治組織である(F. Beckmann and K. Beckmann 2013)。スハルト政権期の1979年から、インドネシア各地のアダットにもとづいた伝統村落は、効率的な村落開発のためにジャワの村落デサ(*desa*)をモデルとした行政村落へと置き換えられていった。西スマトラ州においては、規定の行政村落よりも規模が大きいため、ナガリは解体された(F. Beckmann and K. Beckmann 2013)。やがてスハルト政権が崩壊し地方分権化の気運が高まると、「ナガリに戻ろう」のスローガンのもと、アダットの再興を求めて行政村落をナガリへと戻そうという運動が始まった。

ミナンカバウの人びとの事例においてさらに興味深いのは、ナガリが復活した現在においてもアダット復興運動と関連した動きが続いていることである。その動きとは、すなわち西スマトラ州をミナンカバウ特別州(*Provinsi Daerah Istimewa Minangkabau*: 以後 DIM と記す)へと変えることで、アダットにより強い正当性を持たせようというものであった。「ナガリに戻そう」という目的が達成された西スマトラ州において、なぜ依然としてアダットの正当性が求められるのだろうか。本稿では、ミナンカバウにおけるアダット観念の変遷を辿りつつ、DIM 設立運動におけるアダットの特徴を明らかにしたい。

以上の問いに答えるために目を向ける必要があるのが、イスラームである。インドネシアを含めたイスラーム諸国に関する研究では、「イスラーム主義」と呼ばれる現象に注目が集まっている。イスラーム主義とは、『近代化』の流れを十分に意識し、そのさまざまな影響を被りながら、それでもあえてイスラームを政治的イデオロギーとして選択し、それにもとづく社会改革運動を行なおうとする」(大塚 2000: 9) ムスリムの活動を指している。後述するように、DIM 運動は西スマトラ州におけるイスラーム主義と結びつきながら展開していた。結論を先取りすれば、運動の参加者たちは DIM を実現しアダットの正当性が高まることで、よりイスラームの理念に近い社会へと至ると考えていたのである。本稿では、アダットとイスラームの絡み合いを時系列的に追いながら、DIM 運動の

特徴に迫っていく。

## 2. 背景

### (1) アダットをめぐる研究

Bowen (2003:45) によれば、アダットをめぐる研究は大きく 2 つに分けることができる。第一に特定社会における規範と実践を描写し比較するもの (F. Benda-Beckmann 1979; ギアツ 1999; Bowen 1991)、第二に「アダット」という用語がいかに使われてきたのかを歴史的に明らかにするもの (Burns 2004; Bowen 2003; 高野 2015) である。

第一のアプローチにおける特徴は、クリフォード・ギアツの研究に端的に表れている。ギアツは、多元的法体制に関する議論において、アダットをどのように解釈することができるのか論じた。彼が注目するのは「適切さ」である。すなわち、アダットにおいては「共同体的な一致がもつ物音たてぬ完璧さ」(ギアツ 1999: 354) が目指されており、そこに至るための適切な方法こそがアダットであるという。そのために諺が引用されたり、共同体内での話し合いが「アダットに則って」行われたりするるのである。

第二のアプローチでは、社会規範としてのアダットの重要性を認めつつも、アダットを取り巻く政治経済的状況に注目することで、より動的に描く手法が採用されている。このアプローチが登場した当初の問題意識は、オランダ植民地主義がアダット観念の形成に大きく関与しているというものであった。

オランダは 20 世紀に入ってから蘭領東インド (現在のインドネシア) 内政への関与を強めていく。その際に問題となったのが、蘭領東インドにも本土と同じ法律を一律に適用すべきか否かという点であった。統一法制を主張したユトレヒト学派と、原住民の法を尊重すべきとするレイデン学派の論争が行われ、結果的に後者が勝利した (Burns 2004)。すると、ファン・フォレンホーフエンを中心とするレイデン学派は、原住民の法を「アダット法」(*adatrecht*)<sup>1</sup>と名付け、体系的な研究を進める一方で、アダットを蘭領東インド内で本土の法律と同等の正当性を持つ法源として司法制度へ

---

<sup>1</sup> Recht はオランダ語で「法」を意味する。

と組み込んでいった。Burns (2004)によれば、この過程においてアダットはより体系的な「法」としての性格を帯びていったという。すなわち、原住民たちの規範の寄せ集めであったアダットが「法」へと変質していったというのである。

アダットを動的に描くという手法は、ポスト・スハルト期におけるアダット復興運動をめぐる研究においても採用されている。スハルト政権下では、バリの民俗芸能など中央政府の開発計画に役立つとされたアダットは奨励された一方で、各民族固有の土地権など開発を阻害するとされたアダットは抑え込まれていた。ポスト・スハルト期のアダット復興運動は、その抑え込まれていた住民たちの感情が噴出するかたちで現れたものであったと捉えることもできるだろう。ただし、そこで復活したアダットは単なる「復活」ではなく、現在の人びとが置かれた政治的状况と思惑が組み合わさったものであるという (Davidson and Henley 2007)。この指摘を踏まえれば、アダット復興運動は、あくまでも各エスニック・グループの個別的な文脈において理解されるべきなのである。

ミナンカバウにおけるアダット復興運動の場合、運動の進展にともなって、ポスト・スハルト期のインドネシアにおけるもうひとつの潮流と連動していった。すなわち、イスラーム主義である。次にインドネシアにおけるイスラーム主義の状況を提示したうえで、ミナンカバウの事例を見ていきたい。

## (2) イスラーム主義をめぐる研究

先に見たように、イスラーム主義とは「近代化」のなかでイスラームを政治的イデオロギーとして選択し、それにもとづく社会改革運動を行おうとする思想である (大塚 2000: 9)。大塚による定義は、アイケルマンとピスカトーリによるイスラームの客体化論に拠っている (Eickelman and Piscatori 1996)。すなわち、現代のイスラームは、近代に入って多様な価値観がムスリム社会に流入したあとに自らのアイデンティティとして選び取られたものであり、それまでのイスラームのあり方とは異なるというものである。

イスラームの客体化論に関しては批判もあるが<sup>2</sup>、少なくとも本稿で取り上げる DIM 設立運動には当てはまると考えられる。DIM 設立の理念は、「グローバル化」や

---

<sup>2</sup> イスラームの客体化論に関する批判としては Agrama (2012) を参照。

「西洋化」によって衰退したアダットとイスラームの価値観へ立ち戻り、社会変革を目指そうとするところにあるからである。

インドネシアにおけるイスラーム主義は、スハルト政権下における反共産主義政策と、その一環として行われたイスラーム教育の充実、イスラーム出版の興隆によって引き起こされた（Hefner 2011; 見市 2014）。ただし、この時代にはイスラームにもとづいた政治活動は禁じられていたため、福祉活動や宣教活動を通して確実にイスラームの価値観は支持を集めるようになっていった。ポスト・スハルト期にはイスラーム政党を自由に結成することも認められ、社会をよりイスラームの理念に近い形へと変革していこうという社会運動も現れた。

政治学者の見市（2014: 22）は、ポスト・スハルト期に表れたイスラーム主義の社会運動の特徴として、社会の腐敗に関する認識とそれに対抗するイスラームの合理性の導入というイデオロギーがあると指摘している。つまり、インドネシアにおける社会問題の原因をイスラームの規範からの逸脱に求め、より「正確な」イスラームに立ち戻ることで解決を図るという考えが見られるというのである。

ただし、イスラーム主義の特徴は地域によって多少異なってくる。例えば、ジャワでは精霊信仰など非イスラーム的な要素の排除が重要なテーマであった（Hefner 2011）。一方、本稿で取り上げるミナンカバウにおけるイスラーム主義は、以下で見ていくようにアダット観念と結びつきながら「かつて実現した理想の社会」への回帰という形で表れたのである。次章では、アダットがいかにしてイスラームと結びついていったのかミナンカバウの歴史を振り返りながら論じていきたい。

### 3. ミナンカバウにおけるアダットの系譜学

#### (1) ミナンカバウの人びと

ミナンカバウは、現在の西スマトラ州およびその周辺を故地とするエスニック・グループで、そのほとんどがムスリムである。彼らは出稼ぎや移住（*merantau*）を好む人びととして知られており、マレー半島のネグリ・スンビラン州にはミナンカバウの出自を主張する人びとが居住しているほか、メダンやジャカルタといったインドネシアの大都市にも多くのミナンカバウの人びとが生活している。国内で流布しているス

テレオタイプ化されたミナンカバウ像では、これら各地を渡り歩いて利益を求める商人であるとされており、しばしばテレビドラマなどでも「金に目がない人びと」として描かれる。

上記のような定型化された民族表象の一方で、インドネシア独立期から現在に至るまで、ミナンカバウの人びとのなかからは著名な政治家や学者が多く登場している。インドネシア共和国初代副大統領ムハマッド・ハッタ (Muhammad Hatta)、インドネシア共産党を率いたタン・マラカ (Tan Malaka)、初代首相シャフリル (Sjahrir) といった独立期の中心人物から、インドネシアを代表するイスラーム知識人の通称ハムカ (Hamka) やシャーフィー・マアリフ (Syafi'i Maarif) などがある。このような著名人たちがミナンカバウのなかから現れたことに現在の人びとは誇りを持っており、後述するようにミナンカバウ特別州運動のなかでも重要な意味を帯びている。

しかし、ミナンカバウの人びとに関して最も頻繁に言及されるのは、「敬虔なムスリムでありながら、母系親族関係を定めたアダットを奉じている」という点であろう。基本的にミナンカバウの人びとはすべてムスリムである。イスラーム法では、1人の財産が所有者の死に伴って相続される際、基本的に息子たちは娘たちの倍にあたる額を受け取ることができるとされている。一方でミナンカバウのアダットでは娘がすべての財産を相続することが定められている。このように、ミナンカバウにおける財産相続は矛盾を孕んでいる。この矛盾に関しては、研究者が多くの論考を発表してきただけでなく (Abudullah 1966; Kato 1982; Hadler 2008; Huda 2008)、当のミナンカバウの人びとも様々ななかたちで向き合ってきた。現在では、西スマトラ州で行われているミナンカバウ文化に関する授業の題材としても扱われているため、一般の人びとにまで「母系制」(matrilineal) という言葉は浸透しているほどである。

詳しくは後述するが、母系のアダットとイスラームの並立に関しては、現地の知識人とイスラーム学者の協議が何度も行われ、現在では矛盾しないものとして見なされている。むしろ、「アダットはイスラーム法に基礎を置き、イスラーム法は聖典(クルアーン)に基礎を置く」(*adat basandi syarak, syarak basandi kitabullah*: ABS-SBKとも略される) という定型化された語りが人びとのあいだで広まっており、ミナンカバウのモットーとなっている。そして、DIM運動もアダットとイスラームが相補的な役割を果たしているという認識にもとづいて展開されていた。以下では、主に歴史学

の研究成果をもとに、ミナンカバウの人びとが母系のアダットとイスラームに結びついていった背景について述べていく。

## (2) 母系のアダットとイスラームの相克

ミナンカバウは、常に母系制と明確に結びついていたわけではない。アダットをめぐる歴史を紐解けば、母系制はイスラームからの批判に答えるかのように体系化されていったことが分かる。ここではインドネシア独立までの歴史を振り返りながら、いかにして母系のアダットがミナンカバウの自己意識と結びついていったのか明らかにする。

歴史家の Andaya (2008) によれば、ミナンカバウという語が一般的に使われるようになったのは、およそ 15 世紀のことである。ただし、当初は母系制と結びつけたかたちで考えられてはおらず、西スマトラのパダン高地に位置したパガルユン王朝の王と、その支配地域の人びとを指してミナンカバウと呼ばれていたようである (Andaya 2008)。

母系原理が強調され始めたのは 16 世紀ごろであり、周囲のマレーやバタックといったエスニック・グループとの違いを強調するためであった。15 世紀から 19 世紀にかけてのスマトラ島とマレー半島の周辺では、マラッカ王国、ジョホール王国、アチェ王国が勢力を争っており、それらとの差異化のために母系のアダットがパガルユン王朝の影響のもとにある人びとのあいだで選り取られ、それが「ミナンカバウ」というエスニシティと結びついていったのである (Andaya 2008)。

パガルユン王朝の権威の源泉はパダン高地で採掘された金であった (Dobbin 1987)。しかし、18 世紀には金が枯渇し影響力を失っていく。一方で、同時期には西スマトラ州の各地でコーヒーなどの換金作物栽培が盛んになっていた。これらの換金作物栽培地域からは、資金を貯めてメッカへ巡礼に行く人物が現れた。彼らはメッカで影響力を持っていたワッハーブ派の思想を持ち込み、広げていった。彼らが理想としていたのは純粋なイスラームへの回帰である。当時の西スマトラの市場は村落の外にあり、盗賊の被害にあることも多かった。メッカから帰った人びとは、イスラーム法を完全に施行することで市場の治安を安定させ、安全な商売取引を望んでいたのである。彼らにとって、ミナンカバウの母系制と妻方居住はイスラーム法に反するものであり、

破棄されなければならなかった。やがて、ワッハーブ派の影響を受けた人びとはミナンカバウの伝統を「純粋なイスラーム」へと置き換えようとパガルユン王朝に対する戦い、すなわちパドリ戦争 (*Perang Paderi*) を始める。当初はイスラーム法施行を求めるパドリ派とパガルユン王朝を存続させようとする伝統派の争いであったが、後者がオランダに助けを求めると、戦争はパドリ派とオランダ軍との戦いへと発展する。パドリ派はパガルユン王朝を倒すにまで至ったが、結果的にはオランダ軍によって制圧されてしまう (Dobbin 1987)。

本稿において重要な点は、パドリ戦争がミナンカバウのアダットへ与えた影響である。Hadler (2008) によれば、パドリ戦争を経ることで、ミナンカバウの母系制は「守られるべきアダット」へと変質したのだという。すなわち、伝統派によって守るべき伝統として称揚されることで、母系の親族体系と母から娘への財産相続の慣行はミナンカバウに固有なアダットとして認識されていったのである (Hadler 2008)。

イスラームとアダットの論争はそのあとも続いた。メッカでイスラーム学者として活躍したアフマッド・カティブ (Ahmad Khatib) は、自らの著作のなかで母系のアダットを痛烈に批判した。彼は西スマトラのアガム地方の出身である。カティブによれば、ミナンカバウのアダットは母から娘のみへの財産を認めている点においてイスラーム法に反しており、アダットに従う者はイスラーム教徒ではないという。すでに西スマトラに住む人びとの多くがイスラーム教徒であったことを考えれば、カティブの判断は非常に大きなインパクトを与えたと考えられる (Huda 2008)。

カティブの著作に対しては、反論が提出された。西洋教育を受けたジャーナリストのダトゥック・スルタン・マハラジョ (Datuk Sultan Maharajo) は、ミナンカバウの財産体系をより細分化したかたちで提示したうえで、イスラーム法の適用外に当たると主張した (Huda 2008)。

20世紀に入ると、カティブのもとでイスラームを学んだ学者たちが改めてアダット批判を始める。彼らはエジプトにおけるイスラーム改革派の影響も受けており、純粋なイスラームへの回帰とともに西洋的な知識との整合性も重視していた。これら改革派は、師のカティブとは異なり、母系のアダットを部分的に容認するような著作を残している。すなわち、アダットを完全に放棄するのではなく、イスラームと共存可能なかたちとなるように新たな解釈を提出したのである。著作のなかでは、古くからの



母系リネージの共有地と新たな開拓地という区分が導入され、後者に限ってイスラーム法が適用されるべきだと論じられている (Huda 2008)。

20 世紀には、改革派に対抗するかたちでアダットの保護を主張する人びとも現れている。彼らはオランダ植民地政府のもとで働いていた貴族層の人びとであり、それぞれ雑誌を刊行して自らの主張を広めていった。例えばミナンカバウのアダットを外来のイデオロギーから守ることを目的として設立された「プルクンプラン・ミナンカバウ」(Perkeompoelan Minangkabau) の文書のなかでは、各民族に 1 つのアダットがあると書かれている。Kahn (1993: 110-148) によれば、この時期までにアダットは各民族の生活を定めるシステムティックな原則として捉えられるようになった。つまり、アダットは明確なかたちでミナンカバウとしての自己意識と結びついたのである (Kahn 1993)。

上記のような論争を背景として、インドネシア独立後にはイスラーム指導者とアダット保護を訴える人びとのあいだで何度も話し合いが行われた。例えば、1952 年に行われた会議のなかでは、古くからの母系リネージの共有地にはアダットを、新たな開拓地にはイスラーム法を適用することが合意された。もちろん、一度の会議で問題が解決されたわけではなく、同様の話し合いは 1967 年、1968 年にも行われ、やはり同様の結論に至っている。これらの会議の結果は西スマトラの人びとに知られるようになり、イスラームとアダットは矛盾しないことが確認されたのである (Huda 2008)。

このように、当初はパガルユン王朝の支配地域を示す言葉であった「ミナンカバウ」はエスニック・グループとして実体化され、その特徴としての母系制と結びついていった。そして、イスラーム法の施行を求める人びとからの批判に対抗するかたちで、アダットはさらに体系化され、イスラームとのあいだで妥協点を見つけるに至ったのである。

Kahn (1993) によれば、20 世紀のミナンカバウ社会におけるアダットに関する言説の特徴は、非時間的性質にある。すなわち、オランダ人がやってくる前の時代が「アダットの時代」(*zaman adat*) として描かれ、アダットとイスラームが完全に機能していたことが想定されているのだという。言い換えれば、この時期までに母系のアダットとイスラームは「本来のミナンカバウ社会」として想起されるようになっていったのだ。

### (3) インドネシア独立後のミナンカバウとアダット

インドネシア独立前におけるミナンカバウのアダットへの対抗勢力がイスラームであったとすれば、独立後の対抗勢力は中央政府であった。

1945年8月15日に日本軍政が終わりを告げると、インドネシア共和国は翌々日の8月17日に独立宣言を行った。再植民地化を図るオランダとの独立戦争を経て、1949年にはハーグ条約が結ばれ、インドネシアが独立国家として歩んでいくことが確定した。しかし、それから10年も経たない1958年、西スマトラは南スラウェシなどとともにインドネシア共和国から離脱し、インドネシア共和国革命政府（Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia：以下、PRRI と略す）を樹立することを宣言した。首都は西スマトラの都市ブキティンギである。

PRRI の背景には中央政府への不満があったと言われている。1954年には西スマトラ州知事にジャワ出身のスマルジト（Sumarjito）が指名され、2年後の1956年には西スマトラ出身のハッタ副大統領がスカルノ大統領によって解任された。中央での政治からミナンカバウが排除されているという認識が広まり、人びとのあいだで中央政府への反感が高まっていった。さらに、開発計画が地方にまで及んでいないことも人びとの不満の種であった。すなわち、PRRI は地方自治を求める運動としてスタートしたのである（F. and K. Benda-Beckmann 2013: 106-107）。

この時期、西スマトラ州の各地ではアダット活性化のための運動が起こった。1950年代の初めにはアダットの活性化のためにパガルユン王宮の再建を求める活動家が現れた。また、1957年には「アダットを復活させる」ための会議が開催され、多くの参加者を集めたという。インドネシア独立という大きな目標が達成されたあとの時代において、ミナンカバウの政治家たちはエスニックアイデンティティを追求するようになったのである（F. and K. Benda-Beckmann 2013: 106-107）。

結局、PRRI はすぐに鎮圧され、西スマトラはインドネシア共和国に留まることになった。西スマトラの人びとは中央政府から疑いの眼差しで見られるようになり、ミナンカバウ出身の中央の政治家の数は減少していった（Kahin 1999: 228-229）。西スマトラが中央政府から周縁化された立場から抜け出すのはスハルト政権の成立を待たなければならなかった。

1965年にクーデターののちにスカルノが失脚すると、30年続くスハルト独裁体制が始まる。スハルト体制の下では、地方にまで十分な開発資金が投入され、ミナンカバウへの疑いの眼差しはなくなった。しかし、スハルト体制下のインドネシアでは、アダットに関する事柄は基本的に制限されたといっただろう。先述したように、中央政府の開発計画に益するアダットは奨励された一方で、中央政府の権威を政治的に脅かすと評価されたアダットは制限された。すなわち、高野（2015: 42）の言葉を借りれば、アダットは「無害化」されたのであり、民族衣装や伝統舞踊へと収斂されていったのである。

西スマトラ州の場合、スハルト政権下における最も重要な変化は伝統村落ナガリの解体であった。冒頭で述べた通り、ナガリとは経済基盤としての村落共有地を持ち、母系親族集団の首長（*datuk*）たちの寄り合い「ナガリ・アダット評議会」（*Kerapatan Adat Nagari* : 以下 KAN と略す）によって運営される政治組織である。このナガリのように、従来のインドネシアの村落は各地のアダットに依拠するかたちで成り立っており、人口も面積も不均一であった。スハルト政権は1974年に村落法を制定し、各地の村落行政を均一化された行政村デサへと改変することで、より効率的な開発を進めようとしたのである（島上 2003: 166）。

もともと、西スマトラ州政府はデサへと改変する義務を負っていたわけではない。しかし、中央政府からの開発資金はデサ毎に与えられるために解体した方が有利だったのである。特にナガリはデサよりも規模が大きな場合が多かったため、開発資金のために解体が行われた。こうして、1984年には関連する州条例が制定され、ナガリはデサへと置き換えられていった。

当時の人びとの反応に関しては一概に述べることはできないが、後述するようにスハルト政権崩壊後に行われた州政府による調査では、多くの村落住民がナガリ解体によってアダットが機能しなくなったと感じていると報告されている。その原因は首長たちが村落行政から外れたことにあると考えられる。スハルト政権の初期には、首長たちは村落行政のなかに役職が与えられており、活動を行うための資金源があった。しかしデサになったあとは行政村長たちが実権を握ったため、首長たちの活動資金はなく、そのポストに就こうとする人物さえいなくなっていったのである（F. and K. Benda-Beckmann 2013: 127-138）。

一方で、スハルト政権期には一定程度のアダットへの配慮も見られた。すなわちスハルト主導による「ミナンカバウ世界アダット評議機構」(Lembaga Kerapatan Adat Alam Minangkabau : 以下、LKAAM と略す) の設置である。LKAAM は各ナガリのKAN を統括する役割を持ち、州から県 (*kabupaten*)、区 (*kecamatan*) に至るまで支部を持った。スハルト政権は、ナガリを解体しつつも KAN の機能を残すことでアダットへの配慮を示しつつ、LKAAM を通してアダットの政治活動をコントロールしていたとみることができるだろう。LKAAM によってミナンカバウのアダットは初めて州から村落に至るまで組織化されていった。

#### (4) ナガリへの回帰とイスラーム

スハルト政権が崩壊する直前の 1998 年、地方分権化への期待が高まるなか、当時の西スマトラ州知事による主導のもとでナガリ回帰に向けた調査が行われた。調査を担ったのは LKAAM 関係者と大学教員たちである。彼らは複数のナガリの KAN を訪問し、首長たちに聞き取りを行った。調査報告には、住民たちが現在に至るまでナガリへの帰属意識 (*rasa bernagari*) を感じていること、ナガリが解体されたことでアダットが十分に機能せずに荒廃していることが結論として示されている。この報告を受けて、西スマトラ州はナガリを復活させるための州条例や県条例を制定していった。以上の流れから分かるように、ナガリへの回帰は州政府が主導するかたちで行われたのであり、村落住民たちからすれば「上から与えられた」ものだったのである。

もともと州政府から与えられた「ナガリの復活」という選択肢は、村落住民たちからも支持されていたようだ。ナガリを復活させる手続きは住民たち自らが行う必要があった。この手続きは比較的スムーズに行われ、2003 年には西スマトラ州内の全 543 のナガリが復活した (F. and K. Benda-Beckmann 2013: 211)。このことから住民たちの多くがナガリの復活を望んでいたことが分かる。Biezeveld (2007: 213-220) によれば、村落住民たちがナガリ回帰に賛同していたのは、それに伴って村落共有地を容易に使用することができると思ったためである。この時期にはアジア通貨危機の影響でルピア安が進むことで換金作物の買取価格が高騰しており、住民たちは新たな耕作地を求めていたのである。すなわち、州レベルにおいて「アダットの復権」とナガリ内の共同性を取り戻すために行われたナガリ回帰は、村落レベルにおいては住民

たちに経済的な機会を与えることになったのである。

ただし、ナガリ回帰運動において興味深いのは、「スラウ (*surau*) へ戻ろう」というイスラームへの回帰も伴っていた点である。このスラウとは、モスクよりも小さなイスラーム礼拝施設のことで、かつてミナンカバウの未婚の男性たちはスラウで寝泊まりしていたとされている (Azra 2003)。つまり、「スラウへ戻ろう」とはより純粋なイスラームの教えに戻ろうというスローガンなのである。そして、そのための目標として挙げられたのが、「アダットはイスラーム法に基礎を置き、イスラーム法は聖典(クルアーン)に基礎を置く」(ABS-SBK) の徹底であった (Benda-Beckmann F. and K. 2013: 380-398)。

現在のミナンカバウの人びとのあいだで信じられている説としては、ABS-SBK という言葉は、パドリ戦争の際にパドリ派と伝統派のあいだで交わされた停戦契約において初めて現れたとされている。それまでは「アダットはイスラーム法に基礎を置き、イスラーム法はアダットに基礎を置く」(*Adat bersandi syarak, syarak bersandi adat*) という両者を対等な立場に置く言葉が使われていたという (Benda-Beckmann F. and K. 2013: 396)。しかし、ベンダ=ベックマン夫妻 (Benda-Beckmann F. and K. 2013: 396) によれば、実際には 1960 年代まで ABS-SBK という言葉はほとんど聞かれず、1970 年代になって流通し始めたのだらうと指摘している。

彼らの指摘を踏まえれば、ABS-SBK はスハルト政権期に急速に広まり、ポスト・スハルト期には「回帰すべき理念」として認識されるようになったことが分かる。換言すれば、スハルト政権下のミナンカバウにおいてアダットとイスラームはより緊密に結びついていったのである。そして、この結びつきこそがナガリ回帰への動きから DIM 設立運動への移行を生み出していた。

#### 4. DIM 運動におけるアダット

##### (1) DIM とはなにか

筆者が DIM を目指す運動と出会ったのは、調査を始めたばかりの 2014 年のことであつた。西スマトラに関する情報をできるだけ集めようと地元の新聞を購読すると、西スマトラ州を DIM に変えるための議論と、それに関する専門家の意見が掲載され

ていたのである。それまでの予備調査では聞いたこともないトピックであったため、筆者の受け入れ先となっている大学の若手男性教員に質問してみることにした。すると、なんと彼も DIM に向けた動きに参加している一人だという。彼によれば、もしこの計画が実現すれば、ミナンカバウのアダットは西スマトラ州の全領域に適用されるのだという。

インドネシアにおける「特別州」(*Daerah Istimewa*) は、その名の通り「特別な性質」を兼ね備えた州であるとされる。インドネシアの地方行政法 (*Undang-undang Republik Indonesia Nomor 32 Tahun 2004 Tentang Pemerintahan Daerah*) によれば、国家法のみによって統治される他の州と異なり、特別州はその地域独自の法律によって統治されるとされている。2019 年の段階で特別州として認定されているのは、イスラーム法が適用されているアチェ州と、スルタンが世襲制で州知事となることが決まっているジョグジャカルタ特別州のみである。また、特別州 (*Daerah Istimewa*) という名前はないものの、首都として機能するジャカルタ首都特別州 (*Provinsi Daerah Khusus Ibukota Jakarta*) と、自治権が与えられているパプア州 (*Papua*) もある。

## (2) DIM 運動の中心人物とその思想

調査が進むにつれて明らかになってきたのは、ミナンカバウ特別州に向けた動きは、モクタル・ナーム (*Mochtar Naim*) という一人の社会学者によってけん引されていたということである。彼は、シンガポール国立大学で学び、ミナンカバウの人びとの移動に関する論文で博士号を取得したミナンカバウ研究の第一人者の一人である。また彼自身も、西スマトラ州の隣に位置するジャンビ州のスンガイ・ペヌ (*Sungai Penu*) で生を受けたミナンカバウの一人であり、その文化保存に向けた社会活動も活発に行ってきた。彼は、西スマトラ州随一の大学であるアンダラス大学で教鞭を執ったほか、国会議員としても活躍した (*Mochtar 2013: 411-421*)。

ウェブニュースの記事 (*Sumbarsatu.com 2019*) によれば、モクタルによってミナンカバウ特別州というアイディアが初めて提出されたのは、2014 年の 12 月に彼が書いた書面においてであった。残念ながらこの書面を手に入れることはできなかったが、モクタルはインターネットのスレッド上でミナンカバウ特別州に関する議論を

行っており、資料の一部が閲覧できるようになっている。例えば、2016年に行われた西スマトラ州の開発計画を話し合う会合で行われた彼のスピーチの原稿が「ランタウ・ネット」(RantauNet)というGoogleグループで公開されていた。それによれば、西スマトラ州をミナンカバウ特別州へと変える理由は、ミナンカバウが次の5つの「特徴的な性質」を持つからであるという。それをまとめると、次のようになる。

- 1) ミナンカバウの哲学としての ABS-SBK (Adat Bersendi Syarak, Syarak Bersendi Kitabullah)
- 2) ミナンカバウ社会と文化は、母系制 (*matrilineal*) にもとづき、社会親族システムにおいて重要な位置を与えている。ただし、これは母権制 (*matriarkal*) ではない。家族、リネージ、クラン、ナガリにおける権力システムは、父権制 (*patriarkal*) にもとづき、男性の手中にある<sup>3</sup>
- 3) ミナンカバウの父権制は、3つの指導者によって代表されている。すなわち、アダットを司るニニック・ママック (*Ninik Mamak*)、イスラームを司るアリム・ウラマ (*Alim Ulama*)、社会と文化を司るチェルディック・パンダイ (*Cerdik Pandai*) である
- 4) イスラーム法が適用される個人の財産を除き、財産はナガリ、クラン、リネージによって集団共有されている
- 5) ミナンカバウ人は、知識、経験、生活を求めて出稼ぎ (*merantau*) へ行く伝統がある (Mochtar 2016)

以上の5点からは、モクタル考えるアダットの特徴を見て取ることができるだろう。第1点目にABS-SBK(アダットはイスラーム法に基礎を置き、イスラーム法は聖典(クルアーン)に基礎を置く)という言葉を持ってくることで、アダットとイスラームが調和するものであることが強調されている。第2点目では、「母系制ではあるが、父権制である」と書かれている。これは、「ムスリム社会では男性が指導者であるべきだ」という、一般に流布しているイスラーム理解に配慮したものだと考えられる。

---

<sup>3</sup> ここでは、スク (*suku*) をクラン、カウム (*kaum*) をリネージと訳出した。

続く第3点目ではイスラームの指導者がミナンカバウの政治システムにおいて重要な役割を果たしていることが言及されている。第4点目では個人の財産にはイスラーム法が適用される一方、それ以外の財産はアダットにもとづいて共同所有されていると述べられている。これは、前節で見たように、インドネシア独立後に広まったアダット理解である。つまり、モクタールはアダットとイスラームにいかなる対立も見出しておらず、むしろ両者が分かち合えない原理だと考えていることが分かるだろう。

ただし、以上の特徴は一般のミナンカバウの人びとのあいだでも知られている社会の特徴であり、それがDIM設立とどのような関係にあるかは必ずしも明確ではない。そこで、モクタールの主張がより鮮明に打ち出されている文章を見ていこう。次に提示するのはOnlineindo Newsに掲載されていた記事である。Onlineindo Newsは、インドネシアのオンラインテレビ局であり、主にイスラームの教義や世界各地のムスリムたちの現状についての番組を扱っている。モクタールは、このテレビ局のウェブサイトにも頻りに寄稿することでDIMに関する情報を発信しようとしていた。

モクタールは、2015年10月4日に開催されたジャカルタ在住のミナンカバウ人たちの集いにおいて、DIMの「ビジョン」(*visi*)と「ミッション」(*misi*)を伝えた。なぜか現在は記事が削除されているが、Onlineindo Newsには彼の発言録が記されている。モクタールは、まずミナンカバウの人びとが置かれた現状に関する説明から始めている。

現在の西スマトラ州は失墜しています。かつては多くの著名人を輩出することでインドネシアにおいて知られている地域でしたが、統計局によれば現在の西スマトラは第3位だそうです<sup>4</sup>。上から3番目ではありません。下から3番目です。

(中略)

この原因のひとつは、我々が祖先の持っていた価値観をないがしろにしてしまったことです。すなわち、アダットの価値観と我々の宗教の価値観を調和・

---

<sup>4</sup> 記事のなかでは何の項目における第3位なのかについては説明されていない。



統合させたモットー、**ABS-SBK** です。現在、このモットーは単なる言明だけとなっており、我々の生活の中で実践されていないのです。

(中略)

汚職、共謀、ネポティズムは、州から市、区ひいては村に至るまで、上から下まですでに当然のものとなってしまうています。男性と女性の社会関係における不道德な実践<sup>5</sup>も、かつては禁じられ恥ずべきものでしたが、現在では当然の光景となっています。海岸、公園、ホテルや宿泊施設といった娯楽施設は、人びとが欲望を発散するために利用されています。

(中略)

また我々は、森林、丘の斜面、南北に長い海岸線など、かつて広大にひろがっていた村落共有地を放置してきました。これらの大部分は複合企業の手中にあります。彼らはアブラヤシ農園、木材の切り出し、ガスの採掘、鉱物採掘など、自らの利益となるビジネスのために村落共有地を利用しています。我々は、それらの企業の労働者として働くだけです。(Onlineindo News 2015a)

以上の言明に見られるように、モクタールは、現在のミナンカバウの人びとが置かれた状況が理想から大きくかけ離れていると指摘している。その結果、汚職や婚前交渉、経済的困窮が問題化しているのだという。そして、その原因は「我々が祖先の持っていた価値観」すなわち **ABS-SBK** が遵守されていないからだというのである。続いてモクタールは次のように述べる。

だからこそ、西スマトラ州を **DIM** 州に変えることは、緊急の課題なのです。その目的は、かつて我々が持っており、我々の生活のなかに生きていた、祖先の価値観を復活させることです。再び我々の生活のなかで機能するようにし、皆で一緒に自らを正し、すでにコントロールできなくなっている現在の状況から我々を救うのです。(Onlineindo News 2015a)

---

<sup>5</sup> 婚前交渉を指す。

言うまでもなく、ここでモクタールが言及している「祖先の価値観」とはアダットであり、ABS-SBKである。つまり、イスラームと結びついたアダットの価値観へと回帰することで、ミナンカバウの本来の理想的な社会へと戻ることができる」と主張しているのである。換言すれば、DIMの理念の根底にはミナンカバウにおける「社会問題」があり、それを解決するのはアダットであるという考えが見て取れるだろう。

本節の冒頭で取り上げた大学教員も、モクタールと同様のビジョンを共有していた。彼が特に危惧していたのはLGBTに関する事項である。この男性教員の見解によれば、LGBTは西洋からやってきたものであり、ミナンカバウのアダットとは相いれないのだという。しかし、近年はLGBTの認知を求める社会運動が広がっている。それゆえ、DIMを成立させることでアダットを徹底させ、LGBTからミナンカバウの人びとを守らなければならないのだという。

モクタールもLGBTに関して同様の発言を行っている。2015年8月28日のOnlineindo News (2015b)の記事において、彼はスラウ、すなわちイスラーム礼拝所と若者宿を兼ねた施設への回帰を主張した。モクタールによればPRRIが鎮圧された際に、多くの人びとがスラウで逮捕されてしまったことがきっかけとなり、男性たちは自らの生家で寝るようになったのだという。その結果、彼らの姉妹の「女性性」が男性たちに移ってしまい、ミナンカバウの「男らしさ」が失われ、化粧をする男性も現れたと記している。

ミナンカバウに関する民族誌を紐解けば、彼らの主張は誤りであることが分かる。Blackwood (2010: 33-65)によれば、かつて西スマトラにはブジャン・ガディ (*bujang gadih*) というカテゴリがあった。字義としては、ブジャンが若い男性、ガディは若い女性を意味する。彼らはすなわち、男と女という二元論に当てはまらない人びとである。しかし、インドネシア国家の形成と近代化の過程において、男性と女性というカテゴリが明確化されていくなかで、彼らは周縁化されていったという。

DIM設立に奔走する人びとにとってみれば、このような事実はなかったことにされている。彼らにとっては、アダットが「十分に」機能していた時代には彼らの理想が実現していたはずなのであり、そこにLGBTは存在しているはずなどなかったのだ。

この点に、DIM運動におけるアダットの特徴を見ることができる。第一に、Kahn (1993) がいうところの、アダットの非時間的性質である。すなわち、外部からの影

響がある以前の「アダットが完全に機能していた時代」があり、現在はそこからかけ離れた状態にあるという認識のことだ。

第二に、社会を再組織化する規範としてのアダットである。これまでの記述から分かるように、モクタルら DIM の推進者たちは現在のミナンカバウ社会をアノミー—社会的規範が失われ、社会が無統制になった状態（デュルケーム 1985）—にあるものとして見なしている。彼らは、それに対抗して新たに社会を再組織化するために、DIM を成立させ、アダットの規範を徹底させようとしているのである。

以上の特徴は、見市（2014: 22）が指摘する、ポスト・スハルト期に出現したイスラーム社会運動の主張と通底している。その主張とはすなわち、イスラーム本来の規範に立ち戻ることによって社会問題を解決しようとするものである。ミナンカバウの場合、イスラームがアダットの観念と深く結びついているために、問題解決の鍵はアダットの復権にあるとされていたのだ。

### (3) DIM に対する人びとの反応

以上、DIM を推進する人びとの主張をイスラーム主義との関連で明らかにした。それでは、実際には DIM 推進者たちの考えはどれほど人びとに受け入れられているのだろうか。新聞記事と西スマトラ州におけるフィールドワークのデータから分析していきたい。

まずはモクタルに同意する人びとである。LKAAM のリーダーであるサユティ (M. Sayuti Dt. Rajo Pangulu) は、自らの就任式の挨拶にて、DIM を実現することは「絶対に曲げられない信念である」 (*harga mati*) であると述べている (Haluan 2016)。また LKAAM 構成員の一人で大学教員を務める男性も、筆者に対して ABS-SBK を徹底させるために DIM が必要だと述べていた。おおよそ、LKAAM の成員たちは DIM に賛成していると見てよいだろう。また、西スマトラ州の外へ移住したミナンカバウの人びとによる組織「ミナンカバウ経済・文化運動」(Gerakan Ekonomi dan Budaya Minangkabau) も支持を表明し、モクタルをゲストスピーカーとした講演会を行っている。さらに、西スマトラ州知事のイルワン・プライトゥノ (Irwan Prayitno) も賛成していると伝えられている (Sumbarsatu.com 2019)。

一方で反対意見も多い。筆者が参加した「ミナンカバウ経済・文化運動」のセミナ

一では、講演者の一人であったモクタールへ直接疑問が投げかけられた。その質問の内容は、ムンタワイの人びとに関するものである。実は西スマトラ州にはスマトラ本島のほかにムンタワイ諸島が含まれている。そこに住む人びとの多くは非ムスリムであり、ミナンカバウとは異なるエスニック・グループに属している。モクタールは「もちろんムンタワイの人びとはミナンカバウのアダットに従う必要はない」と述べたが、質問者は彼らが州政治のなかで周縁化されることを危惧していた。筆者の受け入れ教官であるムスティカ・ゼット (Mustika Zed) も同じ理由で DIM に反対していた。

メディアで反対意見を提出している人物もいる。ミナンカバウ出身の歴史学者タウフィック・アブドゥッラー (Taufiq Abudullah) である。イスラームに関する情報を発信する全国紙 *Republika* に掲載されたコラムによれば、彼はモクタールとも親交があるために明言は避けたが、DIM に関して質問を受けた際に「何のためだ」と疑問を呈したという (Maarif 2016)。また、そのコラムの執筆者であり、インドネシア最大規模のイスラーム団体ムハマディアの元代表であるシャーフィー・マアリフは、ミナンカバウ社会全体が斜陽の時期にあると述べながらも、「名前を変えても何も変わらない」と DIM の構想を批判する (Maarif 2016)。

それでは著名人以外の一般の人びとは DIM についてどのように考えているのだろうか。筆者が長期的なフィールドワークを行ったパシシル・スラタン県の村落住民たちに質問してみたところ、多くの人びとが DIM について「知らない」と答えた。つまり DIM は一部メディアと LKAAM などの組織のあいだで取り上げられているものの、それ以外の人びとは運動自体を認知していなかったのである。

さらに、「すでにミナンカバウのアダットは、すでに実践されている。それで何の問題があるのだ」と筆者へ問いかける人物もいた。この言説において、ミナンカバウのアダットとは「戻るべき理想の社会」ではなく、日常のなかで常に実践されている生活上の規範なのである。このように一見すると、DIM のための運動は、推進者たちによる「社会を再組織化する規範としてのアダット」と、それ以外の人びとによる「日常生活の規範としてのアダット」という乖離を生み出しているようにも見える。

ただし、注意しなければならないのは、村びとたちも「本来のアダットからかけ離れた状態にある」という感覚を共有していることである。金曜礼拝の際に行われる説教では、「近年の若者たちが外部社会からの影響を受けて、イスラームで禁じられた事

柄に手を染めている」というテーマが繰り返し取り上げられていた。取り上げられたことのあるトピックとしては、薬物や接着剤に含まれているシンナーの吸引、婚前交渉といったイスラームにおける禁止事項から、子どもたちが学業に打ち込まないといったことまで含まれる。説教師たちは、これらの原因をアダットとイスラームからの乖離と捉えていた。彼らによれば、かつて若者の生活指導をしていた母系親族集団の成人男性たち (*ninik mamak*) や母系親族集団の首長がしっかりと面倒を見ないために若者が非行に走るのであり、アダットの価値観へ立ち戻ることによってこれに対抗しなければならないのだという。同様の語りは、男女を問わず多くの村びとたちが賛同するところであった。

このようにアダットからの疎外を感じながらも村びとたちが DIM のような社会運動を支持しないのは、村レベルでアダットを代表する首長たちへの疑念があるからだと考えられる。筆者が下宿していた家の男性は、筆者が首長にインタビューに行く度に「あいつらはアダットなんか知らない。奴らは自分たちの立場を利用して土地を手に入れているんだ」と語った。首長たちの寄り合いである KAN は土地紛争が起こった際に仲裁する役割を与えられている。しかし彼によれば、首長たちはその権限を利用して他人の土地を奪っているのだという。実際に調査村落では、KAN が自らに有利な判決ばかりを出しているとして住民たちによるデモにまで発展している。ナグリ復活によって返還された土地が、結局は首長たちによって占領されてしまうという事例は他の地域でも報告されている (Biezeveld 2007: 218)。すなわち、アダットへの回帰というテーマは単に首長たちエリートの利益になるだけなのではないかという疑念が人びとのあいだで共有されているのである。

モクタールも、DIM の構想が人びとの支持を集めていないことに気が付き始めている。「ミナンカバウ特別州:ユートピアか理想か」と題された記事 (Sumbarsatu 2019) のなかで、次のように語っている。

皆さん、次のように尋ねるでしょう。なぜ西スマトラ州という名前をミナンカバウ特別州に変えなければならないのか、これまで西スマトラ州は何も問題なんかないじゃないか、と。その通り！しかし一方で、この半世紀のあいだ、特に 1950 年代に起こった PRRI のあと、この地域はすべての側面にお

いて「失墜」(*maluncua*)<sup>6</sup>しているように見えます。(Sumbarsatu.com 2019)

彼の説明には、DIM の設立が人びとの支持を受けていないことへの気づきが見て取れる一方で、それでもアダットの黄金時代に戻らなければならないという意思も見ることができる。このように、DIM 設立に向けた運動は、「本来のミナンカバウのアダット」への回帰という夢によって突き動かされているのである。

## 5. おわりに

これまで、アダットとイスラームの社会的位置づけの変遷を見てきた。かつてパガルユン王朝の領域に住む人びとを指していたミナンカバウという言葉は、ほかのエスニック・グループとの差異化の過程において母系のアダットと結びついた。やがてイスラーム思想の潮流に変化が起ころうとすることで、19 世紀から 20 世紀にかけてアダットはイスラームに反するものとなった。しかし、アダットへの批判は逆説的に「守るべき伝統」としてのアダットをミナンカバウのシンボルへと結びつけていく結果をもたらした。インドネシア独立後の混乱の時期を経ると、その傾向は顕著となり、アダットとイスラームはともにミナンカバウの人びとの本来の姿だと見なされるようになった。スハルト政権崩壊後のナガリ回帰への動きのなかでも、アダットとイスラームの結びつきは変わらないばかりか、より強化されたように見える。

長年ミナンカバウ研究を牽引してきたベンダベックマン夫妻 (Benda-Beckmann and Benda-Beckmann 2013: 420-442) は、ミナンカバウのアダット歴史とは、国家法とイスラーム法とのハイブリッド化 (hybridization) であると述べている。しかし、ポスト・スハルト期の DIM 設立運動は単なるハイブリッド化として捉えることはできない。むしろ、アダットは本来あるべきイスラームの理想と調和した価値観であり、アノミー化した社会への対抗策として認識されていた。村落部に住む一般の人びとも、理想としてのアダットと日常生活の規範としてのアダットの格差に戸惑いつつも、基本的には「アダットが完全に機能した時代」という過去像を共有している。DIM 設立

---

<sup>6</sup> 記事はインドネシア語で書かれているものの、この単語のみミナンカバウ語で書かれていた。

運動を通して見えてきたのは、「イスラームの戒律にもとづきつつ、人びとが互いに協力することで繁栄したミナンカバウ栄光の時代」という社会的な自画像と、そこへの回帰を喚起しつづけるアダットという言葉の魔力であったのである。

## 引用文献

Abudullah, Taufik

1966 “Adat and Islam: An Examination of Conflict in Minangkabau,” *Indonesia*,  
2: 1-24.

Agrama, Hussein Ali

2012 *Questioning Secularism: Islam, Sovereignty and the Rule of Law in Egypt*,  
Chicago and London: University of Chicago Press.

Andaya, Leonard Y.

2008 *Leaves of the Same Tree: Trade and Ethnicity in the Strait Melaka*,  
Honolulu: University of Hawai'i Press.

Azra, Azyumardi

2003 *Surau: Pendidikan Islam Tradisional dalam Transisi dan Modernisasi*,  
Jakarta: PT Logos Wacana Ilmu.

Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa

2016 “adat” In Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa, Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia (eds.), *Kamus Besar Bahasa Indonesia* retrieved 11 July 2019, from <<https://kbbi.kemdikbud.go.id/entri/adat> >.

Benda-Beckmann, Franz von

1979 *Property in Social Continuity: Continuity and Change in the Maintenance of Property Relationships through Time in Minangkabau, West Sumatra*, The Hague: Martinus Nijhoff.

Benda-Beckmann, Franz and Keebet

2013 *Political and Legal Transformations of an Indonesian Policy: The Nagari from Colonisation to Decentralisation*, New York: Cambridge University Press.

Biezeveld, Renske

2007 “The Many Roles of Adat in West Sumatra,” In Jamie Davidson and David Henley, eds., *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: Development adat from Colonialism to Indigenism*, pp. 201-223, Oxon: Routledge.



Blackwood, Evelyn

2010 *Falling into the Lesbi World: Desire and Difference in Indonesia*, Honolulu:  
University of Hawai'i Press.

Bowen, John Richard

1991 *Sumatran Politics and Poetics: Gayo History, 1900-1989*, New Haven and  
London: Yale University Press.

2003 *Islam, Law and Equality in Indonesia: An Anthropology of Public Reasoning*,  
Cambridge: Cambridge University Press.

Burns, Peter

2004 *The Leiden legacy: concepts of law in Indonesia*, Leiden: KITLV Press.

Davidson, Jamie S. and Henley, David (eds.)

2007 *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Development of Adat  
from Colonialism to Indigenism*, Oxon: Routledge.

Dobbin, Christine

1987 *Islamic Revivalism in a Changing Peasant Economy: Central Sumatra  
1784-1847*, London and Malmö: Curzon Press.

デュルケーム、エミール

1985『自殺論』宮島喬訳、東京：中公文庫（*Le suicide: Étude de Sociologie, nouvelle edition, 3e trimestre, by Émile Durkheim, Presses Universitaires de France, 1960*）。

Eickelman, Dale F. and Piscatori, James

1996 *Muslim Politics*, Princeton: Princeton University Press.

ギアツ、クリフォード

1999 『ローカル・ノレッジ』梶原景昭、小泉潤二、山下晋司、山下淑美訳、東京：岩波書店(*Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology, by Clifford Geertz, BasicBooks, 1983*)。

Hadler, Jeffrey

2008 *Muslims and Matriarchs: Cultural Resilience in Indonesia through Jihad and Colonialism*, New York: Cornell University Press.

Haluan

2016 “M. Sayuti Kembali Pimpin LKAAM Sumbar,” Retrieved 6 May 2017 from <<http://harianhaluan.com/news/detail/50338/m-sayuti-kembali-pimpin-lkaam-sumbar>>.

Hefner, Robert

2011 “Where Have All the Abangan Gone? Religionization and the Decline of Non-standard Islam in Contemporary Indonesia,” In Michel Picard and Rémy Madinier (eds.), *The Politics of Religion in Indonesia: Syncretism, Orthodoxy, and Religious Contention in Java and Bali*, pp. 71-91, London: Routledge.

Huda, Yasrul

2008 “Islamic Law versus Adat: Debate about Inheritance Law and the Rise of Capitalism in Minangkabau,” *Studia Islamika*, 15(2): 201-299.

Kahin, Audrey

1999 *Rebellion to Integration: West Sumatra and the Indonesian Polity, 1926-1998*, Amsterdam: Amsterdam University Press.

Kahn, S. Joel

1993 *Constituting the Minangkabau: Pemasants, Culture and Modernity in Colonial Indonesia*, Oxford: BERG.

Kato Tsuyoshi

1982 *Matriliny and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*, Ithaca: Cornell University Press.

Maarif, Syafi'i

2015 “DIM, Apa kabar?,” *Republika Online*, Retrieved 6 May 2017, from<<https://www.republika.co.id/berita/kolom/resonansi/16/12/05/ohpvsq319-dim-apa-kabar>> .

見市建

2014 『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』 東京：NTT 出版。

Mochtar Naim

2013 *Merantau: Pola Migrasi Suku Minangkabau Edisi Ketiga*, Jakarta: PT RajaGrafindo Persada.

2016 “Dengan RPJMD 2016-2021 Membangun DIM (Daerah Istimewa Minangkabau),” Manuscript represented in Pertemuan RPJMD Sumbar, Minggu, 13 Maret 2016, di Hotel Balairung, Retrieved 2 May 2017, from <<https://groups.google.com/forum/#!topic/rantaunet/qZVPORs-Xr4>> .

中島成久

2011 『インドネシアの土地紛争 - 言挙げする農民たち』 東京：創成社。

Onlineindo News

2015a “Mochtar Naim: Visi Misi DIM (Daerah Istimewa Minangkabau),” Retrieved 6 May 2017 from < <http://www.onlineindo.tv/news/mochtar-naim-visi-misi-dim-daerah-istimewa-minangkabau/>>.

2015b “Prof. Mochtar Naim: “Balik Ke Surau Dalam Semangat DIM”,” Retrieved 6 May 2017 from < <http://www.onlineindo.tv/news/prof-mochtar-naim-balik-ke-surau-dalam-semangat-dim/>>.

大塚和夫

2000 『近代・イスラームの人類学』 東京：東京大学出版。

島上宗子

2003 「地方分権化と村落自治 - タナ・トラジャ県における慣習復興の動きを中心として」 松井和久編 『インドネシアの地方分権化 - 分権化をめぐる中央・地方のダイナミクスとリアリティー』 pp. 159-225、千葉：アジア経済研究所。

Sumbarsatu.com

2019 “Daerah Istimewa Minangkabau: Utopis atau Cita-cita,” Retrieved 19 July 2019 from < <http://www.sumbarsatu.com/berita/20882-daerah-istimewa-minangkabau-utopis-atau-citacita>>.

高野さやか

2015『ポスト・スハルト期インドネシアの法と社会-裁くことと裁かないことの民族誌』東京：三元社。